

二〇二〇年一〇月 佛教文化学会紀要 第二九号

宗教民族学者金孝敬と大正大学について学問史補遺

大澤 広嗣

宗教民族学者金孝敬と大正大学について学問史補遺

大澤 広嗣

はじめに

(1) 本論の目的と背景

本論の目的は、宗教民族学者の金孝敬キムヒョギョク（김효경、一九〇四〜？）による研究活動について、学問史の補遺を行うものである。金は、植民地の朝鮮から東京の大正大学に留学して宗教学を学び、昭和前期の学界で、活発に業績を発表した人物である。その研究領域は、朝鮮、日本、中国を対象とした。

近年、金孝敬については、大韓民国にあるソウル大学校社会科学大学人類学科の名誉教授である全京秀チヨンギョンス（전경수）氏の研究により、その全貌の詳細が明らかにされた。^① 全氏は文化人類学者の立場から、宗教学と民族学が交差した金の研究領域の学問史に重点を置いて論証を行った。

筆者は、金孝敬が、仏教系大学である大正大学に留学し、仏教界との人脈から自らの学問を切り開いたことに着目したい。全氏とは異なる視点から論述を進めることで、宗教民族学者として、研究活動の基盤に仏教界の支援と協力があったことを明らかにする。いわば全氏が論じた、金の学問史について補遺を行うものである。なお金が専攻した学問分野について、当時の呼称は「宗教民族学」で、現在は「宗教人類学」であるが、時代状況を踏まえるために前者を用いた。

本論を執筆するに至った、背景を述べたい。学術論文に私事を書くことは不相応であるが、本研究は日韓の学術交

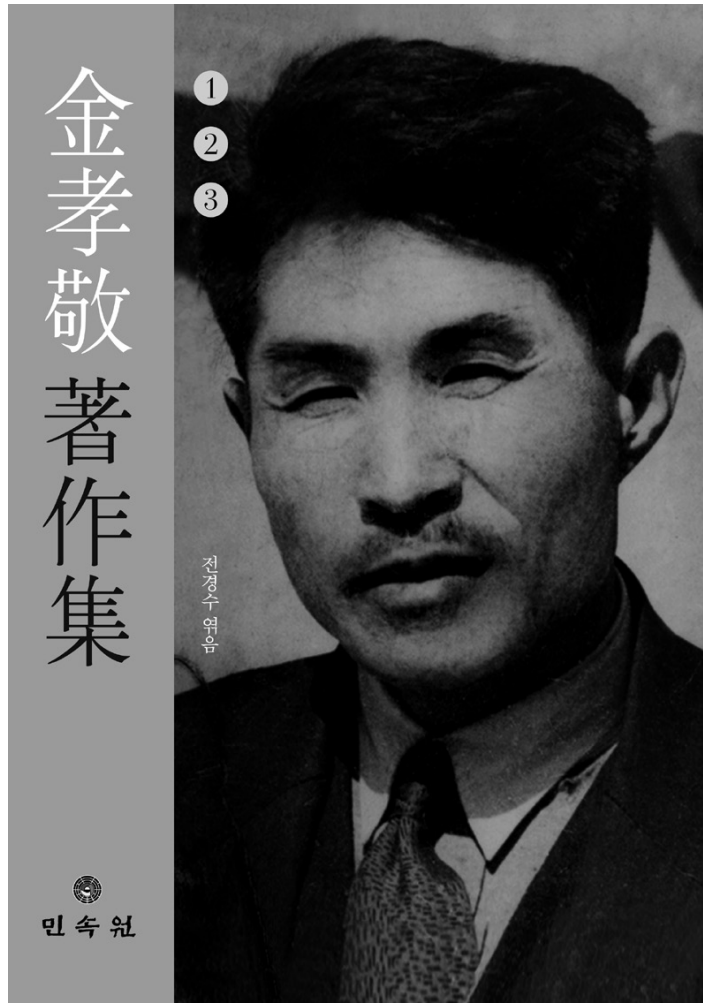


写真 金孝敬著、全京秀編『金孝敬著作集』（全3巻、韓国：民俗苑、2017年）。表紙は戦後の東国大学校教授当時の肖像

流から産出されたため、ここに記録する。

かつて筆者が、大正大学の大学院で宗教学を学んでいた頃、大正大学宗教学会の機関誌『宗教学年報』で過去の冊子を見て気になる点があった。昭和前期の発行号に「金孝敬」なる名前が出てくることである。全国学会の雑誌にも多くの論考を投稿していた人物のようで、どうやら朝鮮半島の出身者であることが分かった。邦訳された全京秀著『韓国人類学の百年』（原著一九九九年）に、金孝敬が紹介されており、しかも全氏は同書の全編にわたり戦前に刊行された日本語文献を駆使して論じていることに驚いた。韓

国での文化人類学の形成は、日本の植民地支配の影響を無視できないからである。

その頃の筆者は、大阪にある国立民族学博物館の地域研究企画交流センターでの共同研究「旧日本植民地研究とデータベースの構築」（二〇〇三〜二〇〇四年度実施、研究代表者・臼杵陽氏^{うすきあきら}）に、中生勝美氏^{なかおかつみ}からの誘いで参画していた。この事業による国際研究集会のため全京秀氏が来日した。その際に、自分は金孝敬が学んだ大正大学での後学者に当たる旨を伝えた。以来、筆者は全氏による金孝敬の研究を全面的に協力した。私自身が、金について知りたかつたからでもある。大正大学の宗教学研究室に所蔵されていた、戦前の集合写真や研究室日誌を電子化して提供した。

宗教専門紙の『中外日報』に多数の論説を投稿していたことを発見した。なかでも、大正大学に保管されていた金孝敬の在籍当時の修学記録が、大学側の理解により全氏へ提供されたことで、学者としての形成期における金の実像が鮮明になった。⁽³⁾

全京秀氏は、その後、韓国内にいた金孝敬の遺族を探し当てて、子息からインタビューを行うなど研究を進め、これまでの先行研究を大きく更新する、金に関する論文を公表した。⁽⁴⁾ 韓国内で金が再評価され、著作集を刊行する機運が高まった。全京秀氏の編集で、二〇一七年に『金孝敬著作集』全三巻が、韓国の出版社である民俗苑から刊行された。⁽⁵⁾ 編集に際して、韓国内で手に入らない文献は、筆者が収集して提供した。同年に、ソウルで「金孝敬著作集出版記念学術大会」が開かれた。韓国の人文系諸分野の研究者が金について研究発表を行ったが、筆者は「金孝敬と大正大学宗教学研究室」と題して韓国語で報告を行った。⁽⁶⁾

本論は、同大会での報告内容と、これまでの全京秀氏との対話に基づく、日韓共同の成果である。金孝敬遺族には、大いに御理解を頂いた。⁽⁷⁾

(2) 金孝敬の略歴

金孝敬の生涯について、全京秀氏の研究をもとに略歴を紹介したい。⁽⁸⁾ 大韓帝国末期の一九〇四（光武八）年に、朝鮮半島の北西部に生まれた。清との国境を隔てる鴨緑江に面した地域に当たり、本籍地は「平安北道義州郡威遠面四下洞一四〇番地」である。当時の日本は、朝鮮への内政干渉を強めて行った時期である。同年に、第一次日韓協約を締結して、その後、第二次（一九〇五年）と第三次（一九〇七年）の協約を結ばせ、大韓帝国の権限を徐々に収奪し、保護国にしていった。そして一九一〇（明治四三）年、「韓国併合ニ関スル条約」により、日本が朝鮮半島を植民地として統治するのである。

金は、新義州公立高等普通学校を卒業して、財団法人朝鮮仏教団の留学生に採用される。一九二六（大正一五）年

に大正大学の専門部仏教科に入り、後に文学部宗教学科で学ぶ。成績は優秀で、卒業後は、宗教学研究室での任期二年の副手を経て、研究生となる。教員と在学生などの関係者で組織した研究組織である光塵会と民俗学同好会の運営に関わる。在学中は、構内にあった学生寮の明照学舎に住んだ。その後は、近隣の「東京市豊島区西巢鴨三丁目六五〇番地 高田方」に移った。

帝都東京を拠点に活動を続け、日本宗教学会の機関誌『宗教研究』には、寄稿者として頻繁に名前が登場する。日本民族学会（現・日本文化人類学会）の機関誌『民族学研究』においては、一九三四年の創刊号から名前が出る常連であった。一九三五年に開設された立正大学の満鮮講座（講座は一九三八年に布教実習科と合併）で講義を行う。一九三九年に実施された海外神社奉仕者講習会では「大陸ノ宗教問題」を講じるが、同講習会は、國學院大學の母体である財団法人皇典講究所が、内務省と協議をして設けた海外神社問題研究会の事業であった。東京芝の浄土宗大本山増上寺内にあった法然上人鑽仰会の事務局に勤務したほか、外務省対支文化事業部補助金を受けた、大正大学教授の荻原雲來を中心とする『漢訳対照 梵和大辞典』の編纂事業にも参加した。この間の一九三四年には、朝鮮の京城（現・ソウル）で設立された震檀学会の設立発起人に名前を連ねるが、同学会は朝鮮出身の歴史学者、文学者、言語学者、民俗学者が参加して朝鮮学研究を目指した学術団体である。

日本の敗戦、すなわち韓国での光復の前後に、金孝敬は朝鮮半島に戻ったと見られる。半島は分断され、南部はアメリカ軍、北部はソビエト軍が進駐した。一九四八年に大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が成立する。金は、ソウルの国立民族博物館の館長を務め、仏教系の東国大学の教授となり専門部文化科や学部仏教学科で教えたほか、ソウル大学校宗教学科で非常勤講師を務めた。

故国での学問が軌道に乗り始めた最中、民族が対立する悲劇が起きる。一九五〇年六月二五日に勃発した朝鮮戦争である。北側が突如として南侵を開始して、六月二八日にソウルが陥落した。この後、金孝敬は北朝鮮軍に拉致される。記録によると、七月一二日に東国大学校に出てくるよう通知に応じた後に、一二日にソウルの中区警察署を経て、

西大門刑務所に収監された後に消息が途絶したという⁽¹⁰⁾。行方は今も分からない。東国大学の教員で拘束されたのは金孝敬だけではなく、歴史学者の高^{コグウオンサム}權三(고권삼)などがあり、北朝鮮は知識人を拉致したのである。

一 財団法人朝鮮仏教団による留學事業

(1) 組織と制度の概要

金孝敬をめぐって仏教界や大正大学との関係を中心に述べていく。金が東京へ留學できたのは、財団法人朝鮮仏教団の留學生事業に基づいたからである。

朝鮮仏教団は、朝鮮民族の信教上の思想の統一を図ることを目的として、一九二〇(大正九)年に設立された「朝鮮仏教大会」を前身とする団体である。設立に際して、京城で百貨店の丁字屋を經營した小^{こばやしげんろく}林源六、在家仏教信者の李元錫(이원석)、朝鮮總督府の通訳官を務めた中村健太郎^{なかむらけんたろう}らが尽力した⁽¹¹⁾。同団は、朝鮮總督府が進める「内鮮融和」を仏教から進めた団体として先行研究で指摘されている⁽¹²⁾。

一九二五(大正一四)年に、財団法人朝鮮仏教団として設立許可を受けた。組織の概要を法人の寄附行為(現行制度では定款)から見る。

財団法人朝鮮仏教団寄附行為〔抄〕

第一条 本法人ハ財団法人朝鮮仏教団ト称ス

第二条 本法人ハ朝鮮ニ於ケル仏教ノ振興普及ヲ図リ人心ヲ教化善導シ民衆ノ福祉ヲ増進スルヲ以テ目的トス
本法人ハ前項ノ外必要ニ応ジ附帶事業トシテ教育、慈善其ノ他ノ社会事業ヲ行フコトヲ得

第三条 本法人ハ其ノ事務所ヲ京畿道京城府長谷川町十七番地ニ置ク⁽¹³⁾

財団の事業として、会館の設置、講演、伝道彙報の発刊、仏像の頒施、朝鮮半島内の三十一本山と共同して教化運動を行い、各道庁所在地や主要地に支部を設置した。団長は男爵の李允用（이윤용）、副団長は陸軍少将の前田昇と^{まえだのぼる}して発足したが、その後の団長は李王職長官で男爵の韓昌洙（한창수）となった。朝鮮仏教団では、機関誌『朝鮮仏教』を発行したが、後には中村健太郎が主宰した朝鮮仏教社が刊行を引き継いだ。¹⁴

布教留学生の制度は、「甲種学生」と「乙種学生」があり、金の採用は前者であった。その要件は、次のとおりである。

布教学生募集要項〔抄〕

一、募集人数 約十名

二、志願者資格

(イ) 甲種学生（内地仏教専門学校ニ派遣シ同校卒業後更ニ約一箇年指定ノ内地寺院ニ於テ布教師トシテ必要ナル実習ヲナサシムルモノ）年齢十八年以上三十年以下ニシテ高等普通学校卒業又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有スル者

(ロ) 乙種学生（内地各宗本山ニ派遣シ指定ノ寺院ニ於テ布教師トシテ必要ナル訓育ヲ受ケシムルモノ）年齢二十五年以上三十五年以下ニシテ普通学校卒業又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有シ現ニ僧籍ニ在ル者¹⁵

つまり金孝敬が採用された「甲種」とは、朝鮮から日本本土にある仏教系の専門学校（大学の専門部を含む）に派遣して、卒業後は更に一年間は指定の日本の寺院において布教師として必要な実習を受けようとする、年齢が一八歳以上三〇歳以下で高等普通学校卒業又はこれと同等以上の学力を有する者であった。

金孝敬が、布教留学生を志望した理由は不明であるが、日本で高等教育を受けるために、布教留学生の制度を利用したのは確実である。布教留学生の区分は、乙種が僧侶であることが条件であったが、甲種は僧侶の身分について条件がなかったため、金は甲種で応募したのである。

この留学事業を行う朝鮮仏教団の活動資金は、各宗派の本山、企業と銀行からの寄附金に基づくもので、日本内地の仏教宗派を所管する文部省宗教局は、事業に理解を示した。

当初の計画では多数の学生を派遣する計画であったが、実際に日本への留学生は総数三〇余名に留まった¹⁶。筆者が確認したところ、計五期二九名が派遣された。当初から僧侶であった人物は少なく、卒業後に僧籍編入を拒否する者が複数いたという¹⁷。このうち、第一期と第二期の留学生について、配属先の学校と受入れの宗派を示す。

第一期生 一九二五（大正一四）年五月派遣¹⁸

（甲種）金勳永（キムフニョン 김훈영） 宗教大学（大正大学専門部仏教科）／浄土宗

李寛承（イグァン승 이관승） 豊山大学（大正大学専門部仏教科）／新義真言宗豊山派

張景模（チャンギョム 장경모） 天台宗大学（大正大学専門部仏教科）／天台宗

（乙種）金東鎮（キムドンジン 김동진） 立正大学専門部別科／日蓮宗

金應珍（キムウンジン 김응진） 駒澤大学専門部別科／曹洞宗

第二期生 一九二六（大正一五）年五月派遣¹⁹

（甲種）高淳文（コスンムン 고순문） 龍谷大学専門部／真宗本願寺派

權寧甲（クワンニョム 권영갑） 大正大学専門部仏教科↓大正大学文学部宗教学科／浄土宗

金臺漢（キムテハン 김대한） 大谷大学専門部／真宗大谷派

金孝敬 (김효경)

大正大学専門部仏教科↓大正大学文学部宗教学科／浄土宗

文暢晏 (문창안)

私立真言宗高野山大学／古義真言宗

兪鉉濬 (유현준)

私立真言宗高野山大学／古義真言宗

李九成 (이구성)

智山専門学校／新義真言宗智山派

崔巨徳 (최거덕)

臨濟宗専門学校／臨濟宗妙心寺派

(乙種) 金洪周 (김홍주)

古義真言宗

金孝敬については、浄土宗が受け入れることになり、大正大学への配属となった。留学に際して、正保証人に窪川旭丈、副保証人に佐藤稠松が引き受けた。両者は、金の学究生活を知る上で重要な人物であるため履歴を見よう。

(3) 正保証人の窪川旭丈

窪川旭丈 (くぼかわきよくじょう) (一八七四〜一九四三) は、浄土宗僧侶である。金孝敬が渡日した当時は、東京芝の浄土宗大本山増上寺の執事長を務めていた。正保証人になったのは、金孝敬の受け入れ宗派が、浄土宗であったからである。

窪川は、山梨県東山梨郡玉宮村 (現・甲州市) に、神社に仕える神官の父増太郎の次男として生まれた²⁰。浄土宗僧侶として得度した後、明倫学舎で漢籍、長野教校、第一教校、浄土宗高等学院で学ぶ。一九〇六 (明治三九) 年に第一大教区の視教となり、一九〇七年に宗会議員、一九〇九年に教学部長、一九一一年に布教部長、一九一三年に庶務部長となるなど、浄土宗の中枢で要職を歴任した。宗門の命令により、一九一四年に朝鮮半島と満洲の宗教事情を視察した後、布教に専念するため、一九一五年に役職を辞した。この間に、東京浅草の龍宝寺、湯島の涼智院を経て、埼玉川越の蓮馨寺の住職を歴任した後、一九二九年から一九三七年まで鎌倉の光明寺一〇四世法主にあつた。宗内では、東京普通宗学院長、増上寺布執事長、増上寺布教師会の初代会長、宗外では仏教連合会 (現・公益財団法人)

人全日本仏教会の淵源)の主事を務めた。

その後は、海外での布教に尽力する。一九三八(昭和一三)年にハワイ開教区(同年にアメリカ開教区と改称)の監督として、ホノルルに赴任して、日系移民たちに法然の教えを伝えた。しかし一九四一年の日米開戦となり、米本土の収容所に抑留され、困難な生活を強いられた。抑留交換船で帰国した後に、遷化した。

このように、窪川の生涯は、宗門の要職から海外布教の現場に進んでいったことが分かる。窪川が、朝鮮仏教団派遣の金孝敬の正保証人を引き受けたのは、甲種学生として大学卒業後は布教師の養成を受け、将来は浄土宗による朝鮮半島布教に資する人材としての成長を期待したからであろう。しかし金は、後述する自著の謝辞で記したように窪川への恩義を忘れなかったが、学究の才能を發揮して、布教者ではなく学者として進んでいった。

(4) 副保証人の佐藤稠松

佐藤稠松(一八七一〜一九三七)は、青年期にクリスチャンとなるが、やがて朝鮮仏教団の事業に協力して、没後は神道の形式で弔われたという、まさに日本の多様な宗教事情を体现する人生を送った人物である。⁽²¹⁾

佐藤は、山形県鶴岡市に生まれた。日本基督教会庄内教会(現・日本基督教団の所属)で斎藤壬生雄さいとうみぶおから洗礼を受けて、プロテスタントのクリスチャンとなった。一八九一(明治二四)年に仙台神学校(現・東北学院大学)へ入学したが、文学を志して、『東北文学』(東北文学社)に評論を投稿した。その後は一八九六年に東京専門学校(現・早稲田大学文学部)文科専科に入り、文豪の坪内逍遙つぽうちしやうようの指導を受けた。『早稲田文学』(坪内主宰)や『東京独立雑誌』(内村鑑三うちむらかんと主宰)などに文学評論を寄稿したが、中退した。

一九〇〇(明治三三)年に、アメリカへ渡り、苺栽培や缶詰工場に勤務した後に、サンフランシスコの日系紙『新世界新聞』の記者となった。一九〇七年に帰国して、坪内の推薦で、一九〇八年に新聞社の『萬朝報』に入社して、教育部長や政治経済部長を歴任した。筆名「佐藤迷羊さとうめいよう」の名義で、多くの小説と文学批評を書いた。筆名はキリスト

者らしく、『新約聖書』の「マタイによる福音書」などに出てくる「迷える羊」に由来した。

一九二四年に、故郷の山形から衆議院議員選挙に出るが、落選した。この頃から、日本女子歯科医学専門学校（現・神奈川歯科大学）で、ドイツ語と英語を教えるなど教育者の顔を持った。

財団法人朝鮮仏教団東京支部の支部長に就任して布教留学生の世話をした。支部長に就任した理由は不明である。推察するに佐藤は、明治四〇年代から「東京府北豊島郡巢鴨町大字巢鴨一四九三番地」に住んでおり、まさに大正大学の前身である宗教大学の敷地近隣であったからである。佐藤は、東京にある他の仏教系大学への留学生の副保証人も引き受けていた。佐藤は、一九三七年五月八日に死去したが、葬儀の形式は、キリスト教式や仏教式でもなく、遺言により神道式で行われた。

佐藤が、朝鮮半島からの布教留学生の世話をしていたのは、教育者としての活動の一環であった。何より自身が、青年期にアメリカへ渡航して苦勞したから支援していたのであろう。

二 大正大学での学修

(1) 専門部仏教科から文学部宗教学科へ

金孝敬は、一九二六（大正一五）年三月に、財団法人朝鮮仏教団の第二回布教留学生に選ばれた。一九二六年度から一九二八年度まで大正大学の専門部仏教科に在籍して、続いて一九二九年度から一九三一年度まで文学部宗教学科に学んだ。在学中の足跡は、既に全京秀氏の研究で、大正大学から提供された学事資料及び宗教学研究室所蔵の日誌に基づき詳細に論じられているので、ここでは繰り返さない。

注意すべきは、金は浄土宗が設立した宗教大学から、仏教連合大学である後身の大正大学の過渡期に入学したことである。一九二六年に大正大学の学部と専門部が設置されたが、後者は「大学令」（大正七年勅令第三八八号）では

なく、「専門学校令」(明治三六年勅令第六一号)に基づく実業教育の機関である。専門部には、高等師範科と仏教科が置かれて、中等学校教員、布教伝道や社会事業に従事する人物への教育を行ったのである。ここでは金孝敬の学究生活について、関係人脈との接点を論じたい。

椎尾辨匡(二八七六〜一九七二)は、一九二六(大正一五)年の大正大学の設立当初に、初代の宗教学研究室主任を務めた。浄土宗僧侶で、東京帝国大学で宗教学を学び、大正大学の前身である宗教大学から宗教学の講義を担当していた。椎尾は、一九二七年に文学部長、一九三六年から一九五七年まで、三回にわたり学長(第六・九・一四代)となった。一九一九(大正八)年と一九二二年に朝鮮半島を視察していたなど、同地に関心を持っていた。一九一九年六月一三日に、椎尾の呼びかけで、東京神田の明治会館で、「朝鮮教化研究会」が開かれた。研究会では、朝鮮教化に関する研究と実施機関の設置を決議したのである。⁽²²⁾ 椎尾は、一九二二年には『京城日報』にて、朝鮮半島の仏教徒の内地留学を積極的に進めるべきことを語っている。「朝鮮民族は東洋人稀に見る有為有望の血液を享有して居る民族であるから之を文化に産業に又は社会百般の方面に誘掖善導する事は我々先進同胞の責任であらねばならぬ」と主張していた。

金孝敬の指導教授は、矢吹慶輝(一八七九〜一九三九)である。大島泰信(一八七四〜一九五二)、眞野正順(一八九二〜一九六二)にも教えを受けた。後述するように金は、矢吹が執筆した浄土宗祖法然の伝記を翻訳した。大島泰信は、一九三六(昭和一一)年に文部省から「精神科学研究奨励金」を得て、課題「風水信仰と我が祖先崇拜」の研究を行うが、金はこれに協力する。⁽²⁴⁾ 金は、中国の影響を受けた朝鮮半島の風水信仰の知識があり、共同研究に貢献した。大島は、作家武田泰淳の実父として知られる。眞野正順は、後述するように法然上人鑽仰会を設立した中心人物の一人で、金は同会に勤務した。

故郷の朝鮮では、日本内地への留学生は大いに期待されていたようで、一九三三年二月の『東亜日報』には、各大学の卒業生の氏名のなかに、金孝敬の名前が見える。⁽²⁵⁾

(2) 外部からの教員

大正大学の宗教学科では、外部からの講師を招いた。駒澤大学教授の大久保幸次（一八八七～一九五〇）は、その一人である。大久保は、トルコを中心とした東洋史学者で、「回教」（イスラームの当時の呼称）を教えていた。以前に筆者は、駒澤での大久保の教え子から聞き取り調査をしたことがあるが、授業は立ち見の学生が出るほど人気で、妻はトルコ人であったという⁽²⁶⁾。

金孝敬が、学部二年の時に、朝鮮仏教団の機関誌『朝鮮仏教』にて、「回教の礼拝と仏教——特に浄土宗の礼拝について」を投稿した。イスラームと仏教の比較研究を行ったもので、金孝敬にとつて、学術論文の体裁で執筆した最初の論文である。論文の末尾には、「此の稿を草するに際し駒澤大学大久保先生の御懇切なる御指導を仰ぎしこと〔中略〕を記して厚く御礼を申し上げます⁽²⁷⁾」との謝辞がある。この謝辞には、大正大学で浄土学を講じた石井教道（一八八六～一九六二）の名前もあり、石井の著作から示唆を受けたと記している。金が、イスラームに興味を持ったのは、大久保の人柄に惹かれるものがあつたのか。ロシア革命で祖国を追われたイスラーム教徒であるトルコ系のタタール人は各地に離散したが、その一部は満洲と朝鮮半島を経て、日本に移住していた。そのため大久保も、朝鮮に留意していたのであろう。

このように金孝敬は、朝鮮仏教団から布教者の育成のため日本に派遣されたこともあつて、学生時代の初期は浄土教の思想と歴史に関心を示していた。浄土宗の機関誌『浄土教報』に「朝鮮に於ける弥陀信仰に就て⁽²⁸⁾」などを寄稿して、学問の訓練を積んでいった。

やがて学術的関心は、宗教民族学に至る。影響を与えたのは、大正大学で講義を持っていた、東京帝国大学文学部宗教学宗教学史講座の助教で、宗教民族学者の宇野圓空（一八八五～一九四九）であった。宇野の助言もあり、卒業論文は朝鮮半島のシャーマンを論じた「巫堂 (mudang) 考」を書き上げた。宗教学研究室では、一九三二（昭和七）

年に機関誌『宗教学年報』を創刊した。第一号には、学生同士で卒業論文を講評する欄がある。金孝敬の卒業論文は、宗教学科同期生の福泉晃道が担当した。以後に金は、巫堂ムーゲンに関する複数の論考を学会誌に発表している。

宇野圓空は、浄土真宗本願寺派の寺院出身であるが、東大での門下生の一人が、棚瀬襄爾たなせじょうじ（一九一〇～一九六四）で、同じ本願寺派の出身でもあった。棚瀬の単著『東亜の民族と宗教』の中に、「畏友金孝敬氏は『支那精神と其の民族性』（昭和十五年）なる書の中に³⁰」と記しているように、いわば宇野に師事した同門で親交があったのである。

（3）単著『支那精神と其の民族性』

金孝敬は、一九四〇（昭和一五）年に、既出の論文をまとめて『支那精神と其の民族性』を刊行した³¹。漢民族の民俗と文化に流れる精神を解明することが目的であった。

同書の冒頭を飾る序文は、恩師の一人である宇野圓空であった。金孝敬による自序には、複数人に対する謝辞がある。人名は記載順のとおりで、属性は筆者が補足した。

①矢吹慶喜（刊行当時は故人、大正大学教授、宗教学、浄土宗）、②宇野圓空（東京帝国大学助教授、大正大学講師、宗教民族学）、③池田清（内務官僚、元・警視總監）、④松田貞次郎（三菱重役、東京鋼機社長）、⑤船田一雄（三菱商事常務、会長を経て、三菱本社）、⑥窪川旭丈（仏教連合会主事、浄土宗増上寺執事長、留学の正保証人）、⑦服部賢成（故人、仏教連合会主事、古義真言宗）、⑧大島泰信（大正大学教授、宗教学、浄土宗）、⑨眞野正順（大正大学教授、宗教学、浄土宗）、⑩加藤章一（大正大学宗教学科の三学年先輩、後に同大教授、新義真言宗豊山派）、⑪土田勝弥（宗教学科の同期生。後に聖語学研究科生、浄土宗）、⑫東慈道（宗教学科の一学年後輩、浄土宗）、⑬川端祐輔（宗教学科の五学年後輩、浄土宗）、⑭谷口英吉（不明）である。官僚と経済人が名前を連ねるのは、朝鮮仏教団の留学事業を支援していたからだ。池田清は、一九三一年から一九三六年まで、朝鮮総督府警務局長を務めたが、朝鮮での民心安寧の目的から朝鮮仏教団の活動に理解を示したのである。

単著『支那精神と其の民族性』は、大正大学仏教学科で学んでいた中国人留学生の胡繼徳（一九四二年卒業）により、中国語に翻訳される計画があつたが実現しなかつた。『中外日報』が、次のように報道する。

日本を盟主指導者とする大東亜共栄圏の確立は世界新秩序建設の上に輝かしき使命として一步一步遂行されてゐるがこれには共栄圏各国の諸民族が相互に充分の理解と認識を深めることが絶対に必要であり今や東洋の研究は愈よ昂揚されてゐる折柄金孝敬氏の労作「支那精神とその民族性」は各方面から好評を博し前記の目的に多大の貢献をなすものとして推賞されてゐるが今度江蘇省無錫高等師範学校を出て上海の大学に学び目下大正大学に留学して宗教学を研究してゐる胡繼徳氏は同著を支那語に翻訳し故国の知識階級に頒布して日本人の観た支那民族性を広く知らしめる計画を樹て着手、国民政府に対しても支援方を要請することになつたのでこれを聞いた元警視總監池田清氏等は日本側に於てもこれも後援すべきであるとして目下工作を進めてゐるので近く右の訳本出版並に頒布が実現されるものと期待されてゐる。⁽³²⁾

そもそも金孝敬は、卒業論文で朝鮮の民俗宗教を論じたが、単著で中国を論じたのは、日中戦争の影響により中国研究が地政学上の需要から高まっていたからである。当時の日本では、アジア関係の図書の刊行が相次いだ。本書は、日本の中国占領に際して、資料として活用することを想定したものであつた。なお、『支那精神と其の民族性』の自序によれば、続編が予定され、「巫覡」、「家族生活」、「礼と法」、「秘密結社」、「面子」、「不死身の生活力」、「民族の性質（人類学的生物学的）」等を収録予定としたが未完となつた。

(4) 訳書の『大聖弘法』と『覚聖法然』

金孝敬は、二冊の訳書を手掛けた。日本仏教に多大なる影響を与えた、真言宗宗祖の弘法大師空海及び浄土宗宗祖

の法然に関する日本語の著述を朝鮮語に翻訳したのである。

刊行順に述べると、法然について、一九三四（昭和九）年三月に刊行された訳書『覚聖法然』は、法然上人降誕八百年記念として岩波書店から刊行された矢吹慶輝による『法然上人』を、渡邊海旭（一八七二〜一九三三）の勧めで翻訳したものである。自序には、前述の椎尾辨匡と眞野正順とともに、浄土宗の関係者である中村辨康、小林圓達、久松鎖瑞、金田明進の名前を挙げている。

空海について、同年九月に刊行された『大聖弘法』は、新義真言宗豊山派（現・真言宗豊山派）の管長であった富田敦純（二八七五〜一九五五）が、弘法大師一千百年遠忌記念として刊行した『弘法大師の偉徳』を翻訳したものである。自序で大正大学学長（第五・八代）の加藤精神、著者の富田、豊山派宗務長の石原恵忍（後に第一〇代学長）、同派教学部の守山聖眞への厚情を記している。富田の著書を翻訳した直後に、『東京日日新聞』（現・毎日新聞）は、金を紹介した。

今では殆ど社会的に力を失つてゐる朝鮮の仏教を復興するため、朝鮮語の新大蔵経をつくらうといふ計画を立てた若い二人の「朝」鮮人仏教学徒がある、大正大学を昭和七年に卒業した金孝敬君と許永鎬君がそれで、許君は卒業後京城の中央仏教専門学校の学監をつとめ、今は朝鮮有数の大寺院慶尚南道東萊の梵魚寺にゐるが、同君は高楠「順次郎」博士の『大正新脩大蔵経』を基礎として約百巻の朝鮮語の新大蔵経の出版を志し、来春その第一巻を出すこととなり、また金君は大正大学宗教学研究室につとめ、教授であつた故渡辺海旭師に助けまされた結果真言宗豊山派富田管長の『弘法大師遺徳』を翻訳、つゞいて伝教、日蓮、親鸞等の伝記を翻訳中である、金君は語る。

朝鮮の仏教にもつと社会的な生命を吹き込む必要があると思ひますので、微力ながらこの仕事を続けてゐる次第です、許君は新らしい大蔵経の出版を企てゝをりますが、朝鮮では現在高麗版の大蔵経がまとまつてをるぐら

るのもので、その企ては朝鮮仏教界に寄与するところが大きいでせう。⁽³⁵⁾

記事が掲載された時点では、前述のとおり空海及び法然について朝鮮語訳の伝記が出ていたが、その後は天台宗祖の伝教大師最澄、日蓮宗宗祖の日蓮、浄土真宗宗祖の親鸞の刊行が予定されていたことが窺える。

先に紹介した『覚聖法然』の刊行会は東京芝の浄土宗大本山増上寺に、『大聖弘法』の刊行会は東京音羽の新義真言宗豊山派大本山護国寺に、それぞれ置かれた。いわば宗派を主体とした事業となった。そう考えると、計画された最澄、日蓮、親鸞の朝鮮語伝記の刊行も、各宗派の企画であったことが想定される。各派では、朝鮮半島に向けて祖師の遺徳と教義を浸透させる狙いがあったのである。

それと共に、翻訳の原稿料により金孝敬の研究生活を支援するために、祖師伝の翻訳が企画されたのではないか。大正大学の関係者から、日本仏教の連合組織である財団法人仏教連合会を構成する各宗派に相談がなされ、企画が立案されたと考えられる。しかし朝鮮語による祖師伝は、続刊がなかった。

なお、引用した記事文中の許永鎬(허영호、一九〇〇～一九五二)は、大正大学の卒業後には、植民地朝鮮の仏教界での言論に影響力を持った人物である。

三 法然上人鑽仰会

(1) 組織の概要

昭和前期に浄土宗僧侶の有志らが、仏教復興のため法然上人鑽仰会を組織した。その成立は、複数の僧侶の対話から始まったものである。眞野正順は、一九三四(昭和九)年に山梨県にある山中湖畔の山荘で、大品般若経の注釈書である『大智度論』の翻訳に専念していた。眞野のもとを訪れていた、大東出版社社主の岩野眞雄(いわたのしんゆう)と仏教学者の友松

圓諦との対話の中で、将来の仏教復興についての実践論が話題になったことが鑽仰会の萌芽であると、会の主事を務めた佐藤賢順が記している。⁽³⁶⁾ 同年の秋以降、関係者は、学界と教界や社会教化に携わる重要人物らと協議を重ね、復興運動を行う法然上人鑽仰会の設立準備に奔走した。

一九三五年四月一二日に、京都の総本山知恩院内の華頂会館にて発会式を挙行した。⁽³⁷⁾ 初代総裁は、浄土宗管長の岩井智海が就任したが、会の規約よれば、「どなたでも会員になれます」としたように、檀家制度ではなく会員制度を取った。事務所は東京の増上寺内の明照会館を拠点としたが、浄土宗務所（現・浄土宗宗務庁）の内部組織ではなく、宗派から独立した任意団体として位置付けられた。簡便な会の規約は制定されていたが、一九三九年七月までに、詳細な会則が定められた。⁽³⁹⁾ 全国各地で支部の設立を奨励して、会員数は発足直後には早くも五千人を突破して、一九四五年までには二万人余となった。⁽⁴¹⁾

一九三五（昭和一〇）年五月に創刊した雑誌『浄土』は、広く人気を博した大衆向けの宗教雑誌であった。宗門の高僧や教学者による法話や講義、信仰相談欄はもちろんこと、仏教を篤信する文化人や学者、著名作家による連載や随筆、読者投稿の俳句と短歌などの欄が充実した。

眞野は、会の設立と運営に尽力したが、大正大学で教えた学生の一人が金孝敬である。金は設立当初から会本部の事務局に勤務した。在職期間中に発行された『浄土』には、金の署名記事がないため、編集担当ではなく主に事務担当であろう。一九三八年九月開催の本部での幹部会及び一九三九年三月に東京日比谷公園内の洋食屋松本楼で開かれた「第一回浄土読者の会」では、本部事務局側として金に参加していたことが見える。⁽⁴²⁾

金は、一九四〇（昭和一五）年三月まで勤務したが、後任者は、大正大学の宗教学科出身の一瀬秀雄（一九三四年卒。後・村瀬秀雄）であった。以前に一瀬は、会の事務局に務めていたが、日中戦争の勃発とともに従軍して、兵役からの除隊後に事務局へ復帰したものである。

(2) 東慈道のいよ

金孝敬が法然上人鑽仰会の本部事務局を退任するまで、同じく勤務していたのが東慈道である。退職時の『浄土』の編輯後記には、次のように記されている。

本部事務所には年度変りを控えて、多少人事の移動があつた。本会創立以来、奉仕してくれた東慈道君と金孝敬君が榮転々出した。今後とも外部にあつて従来通りの支援をしてくれる。長年の労苦に対して、読者諸賢と共に深く謝意を表する⁽⁴³⁾。

「榮転々出」とあるが、読者を心配させないための表現である。真相は後述する東の著述が内務省の検閲で問題となり、事務局を退職せざるを得ない状況から、親友の金はこれに同調したと推定される。

東慈道は、福岡県出身で、大正大学宗教学科での金の一学年下（一九三二年度卒業）になる。『支那精神と其の民族性』の序文には、「最後に本書が斯る体裁を整へ世に見ゆるは、実に全く十有余年行を共にして来た畏友同学の東慈道学兄の賜で、銘じて深く感謝申し上げる⁽⁴⁴⁾」とある。金孝敬の著作の刊行に際しては、東の協力と友情があつたのである。

東慈道は、法然上人鑽仰会に勤務していたところ、陸軍に応召となり華南（中国南部）で従軍したが、軍務の最中にマラリアを発病した。野戦病院での日記の一部は、雑誌『浄土』に掲載された⁽⁴⁵⁾。自宅療養後に除隊となり、一九四〇（昭和一五）年一月までに、鑽仰会本部に復帰した。『浄土』での寄稿をもとに、金孝敬の著作と同じ三友社から、

同年四月に『病める兵の手記』⁽⁴⁶⁾を出版した。序文は眞野正順であつた。同書の広告の説明文は、東の立場と手記の内容を活写している。

若き宗教学徒東氏が、年老いた母と若き夫人といたいな二児を残して応召したのは昭和十三年の晩秋であった。寺院に住まぬ僧侶東氏の唯一の苦悩はその日からの家族の生活であつたと思ふ。而し彼の泰然綽々たる態度は平生と何ら変わる所がなかつた。／＼年少苦難の人生行路は宗教家としての自覚と相俟つて若き聖者の風貌にも似た彼の人格を礎き上げたのだ。今やこの最高峻烈な試練の門出に於て、それが遺憾なく示されたと言ふ事が出来る。従軍年余、遂にたはれて異境に病む身となつた彼が病床四十度の高熱と闘ふこと月余、今更に死と宗教と、友情と恩愛と、常識人としての彼が、死をみつめつゝ如何なる常識を絶した体験を感得したであらふか。／＼言ひうべくんば、これは又、若き求道者が歩んだ人生三十年の記録であり、死への抗議である。戦争と死と恩愛を語る今事変が生んだ最高峰である。／＼戦線銃後の慰問書として是非お求めを!!⁽⁴⁷⁾

広告によれば、東は僧侶であつたが、寺院に専従していなかったことが分かる。「常識を絶した体験」とあるが、本書で東は、日中戦争の悲惨な状況を具体的に描写したのである。戦場で目撃した、死への恐怖を目前とする負傷兵の悲痛を、東は代弁したのだ。

それがかえつて、言論を統制する内務省警保局図書課の検閲で、問題となつてしまったのである。検閲の結果、一九四〇年五月二日付で記述の一部削除の処分が下された。理由は、「本書ハ戦病兵ノ陣中手記ナルガ、描写極メテ陰惨ニシテ、銃後ノ士氣ヲ沮喪シ反戦思想醸成ノ虞アリト被認ニ因リ、一二六頁、一二八頁、一八五頁、一八六頁削除⁽⁴⁸⁾」となつた。

金孝敬がもつとも信頼を置いた日本人の友人が、戦争の実態を告発した東慈道であつたことは、注目すべき点である。

おわりに

金孝敬の学術遺産を、どのように継承していくべきか。日本が進攻した中国を語る、植民地朝鮮出身の学者。これだけで、日本に協力した「親日派」と断定することは、当時の時代状況を無視した評価となり、適切ではない。対日協力という単純な図式ではなく、植民地出身者であるがゆえの向学心と苦悩の結果である。

金孝敬をめぐる学問史において、明確になった二点を指摘したい。

第一に、留学制度の活用である。植民地下の朝鮮半島では、奨学金を得て、日本内地での高等教育を受ける機会に限られていた。金孝敬は、祖国が植民地支配という限定された状況で、日本人主導の財団法人朝鮮仏教団による留学制度を最大限に利用する。布教者ではなく学者となり、日本の学界で精力的に数々の論文を発表した。当初に金が配属された大正大学では、他の仏教系大学と比較すると宗教学の講義と教員が充実しており、金の学問的関心を醸成させるには十分な環境であったのである。留学生制度は向学心に燃えた青年を引き付けたようで、例えば第五期留学生で京城第二高等普通学校から、曹洞宗系の駒澤大学専門部歴史地理科に学んだ盧道陽（ノドヤン、一〇一〇、一九〇九～二〇〇四）は、後年に地理学者となり大韓地理学会の設立に関与した。

第二に、研究生活での金銭的な支援である。金孝敬は、戦後の韓国では教授になったが、戦前の日本では大学の専任教員ではなかった。当初は布教者として期待されたが、寺院活動に従事せず、学者として活動した。研究を行うためには諸経費が必要である。そこで大正大学の教員は、研究に資する様々な仕事を提供して、金の学問生活を支えた。渡邊海旭は矢吹慶輝が執筆した法然伝の朝鮮語翻訳を勧めて翻訳原稿料が出る仕組みを作り、大島泰信は金との共同研究で文部省から研究費を得て、眞野正順は設立に関与した法然上人鑽仰会の本部事務局の仕事を紹介したのである。こうして金は、大正大学の教員の人脈から、研究活動が金銭的に持続することを可能にしたのである。

以上のことから、金孝敬の学問は、宗主国日本と植民地朝鮮との二項関係だけで見るとはべきではない。学者としての

発展過程とその学問成果が支配者側の主導であるとはいえ、帝国主義の空間で生きた一人の研究者として、真摯に学問と向き合ったことは評価すべきである。

とはいえ、金孝敬が日本語で書いた論文の行間には、母語の朝鮮語では書くことができない民族の苦難があつたのではないか。それが果たされたのが日本の植民地支配からの解放後。独立した韓国で、思う存分に学術活動が出来るようになったかに見えたが、拉致されて行方不明となり、無念にもその学問が途絶する。かつて、大正大学で教育を受けた学者が、北朝鮮に消えたことを忘却してはならない。

(文化庁宗務課専門職)

- (1) 全京秀 (전경수) 「宗教民族學者金孝敬의 學問訓練과 帝國背景」(『民俗學研究』第三六號、韓國・國立民俗博物館、二〇一五年五月)。後述する『金孝敬著作集』第一卷に再録。日本語訳は、金廣植 (김광식) 訳「宗教民族學者金孝敬の学問訓練と帝国背景」(石井正己研究代表者『国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究』平成二六年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所広域科学教科教育学研究経費報告書、東京学芸大学、二〇一五年三月)。同書のURLは次のとおり。http://www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/rengou/kyouin/news/data_kouiki_h26/07.pdf
- (2) 全京秀『韓國人類學百年』(韓國：一志社、一九九九年)。邦訳は、全京秀著、岡田浩樹・陳大哲訳『韓國人類學の百年』(風響社、二〇〇四年)。
- (3) 大正大学が保管する金孝敬の学事資料は、二〇〇五年度に当時の星野英紀学長の御高配により、大学側から全京秀氏への提供が実現した。
- (4) 前掲、全京秀「宗教民族學者金孝敬の学問訓練と帝国背景」。金孝敬に関する従前の研究に、崔吉城 (최길성) 「金孝經의 巫堂이름, 研究小考」(『比較民俗學』第一二號、韓國：比較民俗學會、一九九五年五月)、任東權 (임동권) 「金孝敬・金永鍵論——一九三〇年代日本에서活躍한 巫學者」(『韓國民俗學』第二八號、韓國：韓國民俗學會、一九九六年十二月)、崔

錫榮(최석영)「金孝敬의「巫堂에 對하여」」(『韓國巫俗學』第二輯、韓國・韓國巫俗學會、二〇〇〇年一二月)、同「金孝敬の「巫堂イズム」に関する基礎的研究」(『韓國の民俗学・日本の民俗学——二〇〇五年度国立歴史民俗博物館国際研究集会』国立歴史民俗博物館、二〇〇六年九月)がある。

(5) 金孝敬著、全京秀編『金孝敬著作集』全三卷(韓國・民俗苑、二〇一七年)。構成は第一卷 著書篇、第二卷 譯書篇、第三卷 論稿篇(一 朝鮮/二 日本/三 中國/四 南洋)。同書は、金が一九二〇～一九四〇年代に発表した論著及び論文を集成したものである。第二卷を除き、ほとんどが日本語で執筆したものである。

(6) 金孝敬著作集出版記念學術大會(近代書誌學會第七回學術大會)は、二〇一七年六月二七日に、ソウル特別市鍾路区仁寺洞の寛勳クラブ信永基金会館にて開催された。主催は近代書誌學會、後援は民俗苑である。同日のプログラムを提示する。

第一部 発表。司会・吳榮植(오영식、『近代書誌』編輯委員長)。(1)大澤広嗣「金孝敬과 大正大學宗敎學研究室」、(2)金光植(김관식、東國大學校佛敎學院特任敎授、佛敎學)「金孝敬의 佛敎에 對한 몇가지問題——朝鮮佛敎團의 在日佛敎留學生事例」、(3)梁鍾承(양종승、사머니즘(Shamanism)博物館館長、民俗學)「金孝敬의 사머니즘 연구와 學問的傾向」、(4)全京秀(전경수、서울(Seoul) 大學校名譽敎授、人類學)「寫眞으로 보는 金孝敬先生」。

第二部 討論。(1)金鍾瑞(김종서、서울 大學校敎授、宗敎學)、(2)千鎮基(천진기、國立民俗博物館長、民俗學、当日は書面参加)、(3)崔錫榮(최석영、國立劇場公演藝術博物館長、人類學)、(4)黃仁奎(황인규、東國大學校敎授、史學)。

近代書誌學會編『近代書誌』第一五號(韓國・召命出版、二〇一七年六月)に、特輯「金孝敬著作集出版記念學術大會」として、第一部での発表内容に基づく各論文が掲載された。

筆者の報告原稿及び『近代書誌』掲載の拙論は、李和珍(이화진)氏(公益財団法人國際宗敎研究所宗敎情報リサーチセンター研究員事務主任)の翻訳による。同日の報告では、ソウル大に留学していた新里喜宣氏(現・長崎外国語大学外国語学部准敎授)に、質疑応答で助力を頂いた。

(7) 前述の記念學術大會の際に、当日参加した金孝敬息の金用善(김용선)氏とその令夫人である金貞子(김정자)氏には、金孝敬の後輩として御挨拶を申し上げた。その後、御夫妻の息女で日本語学者である金瑞瑛(김서영)氏が来日した際には、二〇一八年一〇月七日に大阪にて聞き取り調査を行った。

- (8) 金孝敬の略歴は、前掲の全京秀『韓国人類学の百年』（二二四〜二二七頁）、同「宗教民族学者金孝敬の学問訓練と帝国背景」、同「寫眞으로 보되」金孝敬先生」を参照しつつ、筆者が入手した情報を適宜に含めた。
- (9) 國學院大學八十五年史編纂委員会編『國學院大學八十五年史 史料篇』（國學院大學、一九七九年）、「一九七 海外神社奉仕者講習会講習科目及講師」（五九三頁）。当該資料は、高野裕基氏（國學院大學研究開発推進機構助教）より教示を頂いた。また藤本頼生氏（國學院大學神道文化学部准教授）より、全国神職会の機関紙『皇国時報』掲載の当該講習会に関する記事の提供を受けた。金孝敬の氏名が掲載された記事は確認できなかった。
- (10) 韓国の「六・二五戦争拉北人士家族協議会」が公開する、金孝敬の留守家族が提出した「失郷私民安否探知申告書」より。
http://www.kwafu.org/korean/bbs/download.php?uid=6010&imgDate=20060113&bbs_code=bbsIdx21（二〇一〇年八月一日確認）。提出時期は未詳。
- (11) 『朝鮮仏教社』本社調査部「朝鮮半島に於ける内鮮仏教界の大勢」（『朝鮮仏教』第六五号、京城・朝鮮仏教社、一九二九年一〇月）、四九頁。『朝鮮仏教』は、川瀬貫也氏（京都府立大学文学部准教授）から情報提供を頂いた。
- (12) 朝鮮仏教団については、金淳碩（김순석）「朝鮮佛敎團研究——一九二〇—一九三〇」（『韓國獨立運動史研究』第九號、韓國・獨立記念館韓國獨立運動史研究所、一九九五年十二月）、Micah Auerback著、洪恩美（홍은미）譯「親日佛敎、歴史學의 再考——朝鮮佛敎團과 一九二〇年代朝鮮에서의 僧侶結婚에 對한 論爭」（『亞細亞研究』第五一卷第三號、韓國・高麗大學校亞細亞問題研究所、二〇〇八年九月）、中西直樹「植民地朝鮮と日本仏教」（三人社、二〇一三年）所収の「第四章 文化政治と朝鮮仏教界の動向——朝鮮仏教団の活動を中心に」、岩谷めぐみ「植民地時代の雑誌『朝鮮佛敎』をめぐって——朝鮮總督府との關係」（『立教大学日本文学』第一一一号、立教大学日本文学会、二〇一四年一月）、川瀬貫也「植民地朝鮮における宗教政策と日朝仏教——一九二〇年代から三〇年代を中心に」（『宗教研究』第八九卷第二号、特集「国家と宗教」、日本宗教学会、二〇一五年九月）、孫知慧（손지혜）「植民地朝鮮における中村健太郎と朝鮮仏教団の活動とその意義」（『東アジア文化交渉研究』第九号、関西大学大学院東アジア文化研究科、二〇一六年三月）を参照のこと。
- 朝鮮仏教団の関係者の写真は、金光植（김관식）編『韓國佛敎百年——一九〇〇—一九九九年』（韓國・民族社、二〇〇〇年）に掲載される。邦訳は、金光植編、東アジア仏教運動史研究会訳『一九〇〇—一九九九 韓國仏教一〇〇年——朝鮮・

韓国仏教史図録』（皓星社、二〇一四年）。

- (13) 「財団法人朝鮮仏教団寄附行為」（『朝鮮仏教』第一四号、一九二五年六月）、五一頁。
- (14) 窪川旭丈「所感」（『朝鮮仏教』第八〇号、一九三二年一月）、一九頁。
- (15) 「布教学生募集要項」（『朝鮮仏教』第三四号、一九二七年二月）、〔iv〕頁。
- (16) 中村健太郎『朝鮮生活五十年』（青潮社、一九六九年）、九七頁。
- (17) 無署名「朝鮮仏教団留學生が僧籍編入を忌避／それでは困ると仏連の抗議」（『中外日報』第八二二〇号、中外日報社、一九二七年二月五日）、三頁。
- (18) 無署名「朝鮮仏教団彙報／布教学生派遣」（『朝鮮仏教』第一四号、一九二五年六月）、五〇頁。無署名「朝鮮仏教団彙報／布教学生入学」（『朝鮮仏教』第一五号、一九二五年七月）、五七頁。川村五峰「留學生諸君と語る——愉快な東京支部茶話会」（『朝鮮仏教』第一八号、一九二五年一〇月）、二二頁。
- (19) 無署名「朝鮮仏教団彙報／布教学生の派遣」（『朝鮮仏教』第二四号、一九二六年四月）、五二頁。無署名「朝鮮仏教団彙報／布教学生の派遣」（『朝鮮仏教』第二五号、一九二六年五月）、一〇二頁。
- (20) 大橋俊雄『浄土宗仏家人名事典——近代篇』（東洋文化出版、一九八一年）、六三―六四頁。窪川和順「窪川旭丈」（浄土宗大辞典編纂実行委員会編『新纂浄土宗大辞典』浄土宗、二〇一六年）、三六四頁。
- (21) 佐藤稠松の履歴は、鈴木千代志「佐藤迷羊の生年月日・没年月日をめぐって」（『山形工業高等学校研究紀要』第一六号、山形県立山形工業高等学校、一九九六年三月）、八木光昭「佐藤迷羊の周辺」（『洗足論叢』第二五号、洗足学園大学・短期大学、一九九六年一二月）を参照した。
- (22) 無署名「朝鮮教化研究会」（『中外日報』第五九五〇号、一九一九年六月一七日）、二頁。
- (23) 「予が観たる朝鮮民族 文学博士 椎尾辨匡師談」（『京城日報』一九三二年八月一三日）。神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」が公開する当該記事より参照した。
- (24) 大島泰信・金孝敬「風水信仰の孝道に及ぼせる影響」（『宗教学年報』第二・三輯、大正大学宗教学会、一九三七年六月）。
- (25) 「今春卒業할 日本留學生（下）／奨學部報告에 依한것」（『東亞日報』第三九九六號、京城：東亞日報社、一九三二年二月六日）、

七頁。

- (26) 駒澤大学で大久保の授業を受けた同大名誉教授の山内舜雄（一九二〇～二〇一五）への聞き取り調査による（二〇〇一年六月二〇日）。この時の成果の一部は、拙稿「昭和前期におけるイスラーム研究——回教圏研究所と大久保幸次」（『宗教研究』第七八巻第二号、特集「イスラームと宗教研究」、日本宗教学会、二〇〇四年九月）。
- (27) 金孝敬「回教の礼拝と仏教——特に浄土宗の礼拝について」（『朝鮮仏教』第七四号、一九三〇年七月）、一三頁。
- (28) 金孝敬「朝鮮に於ける弥陀信仰に就て 一～三」（『浄土教報』第二〇一六～二〇一八号、浄土教報社）、一九三三年一月三、一〇、一七日。後に、『朝鮮仏教』第九六、九七号（一九三四年一～二月）再掲。同稿の初出が『浄土教報』であることは、魚尾和瑛氏（大正大学文学部人文学科副手）から情報提供を受けた。
- (29) 福泉〔晃道〕「巫堂考 金孝敬」（『宗教学年報』第一輯、大正大学宗教学会、一九三三年三月）。福泉は、卒業後に、宗教学年報を専門とする東京の教学新聞社に勤務して、後に山ノ井晃道となる。大正大学教授を務めた山ノ井大治の実父。なお、『宗教学年報』の創刊に際して、金孝敬が編集に尽力した。第一輯の編輯後記で、市川修誠が、「研究室が機関紙を持つといふことは、われわれの久しい願望であつた。……この澆漓たる一卷を、自分達に於て見る喜びは、胸に熱い感慨である……終わりに、編輯部の金副手、山城、吉水、永田、杉本、春日井諸君の惜しみなき努力に深謝します」とある。
- (30) 棚瀬襄爾『東亜の民族と宗教』（河出書房、一九四四年）、一三四頁。
- (31) 金孝敬著、宇野圓空序『支那精神と其の民族性』（三友社、一九四〇年）、自序六頁。同書の構成は、次のとおりである。序文学博士宇野圓空／自序／一 民謡に現れたる予言信仰と民俗／二 匪とその思想信仰的因由／三 支那革命不絶の思想根拠／四 神仙憧憬に現れたる支那国民性／五 支那人の風習とその原因／六 風水信仰／七 民族性の集大成としての道教と其特質／八 民衆の心性の帰趨と道院／九 支那とモハメット教／一〇 儒教の功罪及び孔子の一側面／一一 日本は道教を如何に消化したか／一二 風水信仰の日本に及ぼせる影響／附 墓相小言。
- (32) 無署名「金氏著『支那精神とその民族性』を華語に／共栄圈内民族の相互研究／日華両国要人ら完成支援」（『中外日報』第一二四四六号、一九四一年二月一八日）、三頁。
- (33) 矢吹慶輝著、金孝敬訳『覚聖法然』（覚聖法然刊行会、一九三四年）。原著は、矢吹慶輝『法然上人』（岩波書店、一九三二年）。

- (34) 富田敦純著、金孝敬訳『大聖弘法』（大聖弘法刊行会、一九三四年）。原著は、富田敦純述、守山聖眞編『弘法大師の偉徳』（豊山派弘法大師一千百年御遠忌事務局、一九三四年）。
- (35) 無署名「朝鮮の仏教復興に輝く・二新星／仏典の翻訳に精進」（『東京日日新聞』第二〇九四四号、東京日日新聞発行所（大阪毎日新聞社東京支店）、一九三四年二月二四日）、一一頁。大正大学宗教学研究室が所蔵する当時の研究室日誌に、同日の項には当該記事が貼付される。
- (36) 佐藤賢順「法然上人鑽仰会の経過」（『浄土』第一巻第一号、法然上人鑽仰会、一九三五年五月）、八〇頁。
- (37) 佐藤〔賢順〕「法然上人鑽仰会の其の後の経過」（『浄土』第一巻第二号、一九三五年六月）、七八頁。
- (38) 「法然上人鑽仰会規約抜粋」（『浄土』第一巻第一号、一九三五年五月）、七頁。
- (39) 会則について、「鑽仰運動ニュース 本会々則成る 新たなる躍進へ」（『浄土』第五巻第七号、一九三九年七月、五八頁）から抜粋する。
- 法然上人鑽仰会会則〔抄〕
- 第一章 名称及事務所／第一条 本会ハ法然上人鑽仰会ト称ス／第二条 本会ハ事務所ヲ東京市芝区芝公園一五ノ四明照会館内ニ置キ、各地ニ支部ヲ置ク
- 第二章 目的及事業／第三条 本会ハ法然上人ノ遺徳ヲ鑽仰シ信仰修養ニ資スルヲ以テ目的トス／第四条 本会ハ前条ノ目的達成ノ為左ノ事業ヲ行フ／一、法然上人鑽仰ノ文書及信仰修養ニ関スル文書ノ刊行頒布／二、法然上人鑽仰ノ月刊雑誌ノ刊行頒布／三、法然上人鑽仰ノ講演会、講話会、座談会等ノ開催／四、其他目的達成ニ必要ナル事項
- 第三章 総裁及副総裁／第五条 本会ニ総裁副総裁相談役若干人ヲ置ク／総裁ニ浄土宗管長、副総裁ニ四個大本山法主ヲ推戴ス
- 第四章 役員及相談役／第六条 本会ニハ左ノ役員ヲ置ク／一、会長 一人／二、相談役 若干人／一、理事 若干人（内一人ヲ理事長、五人ヲ常務理事トス）／一、主事 一人／一、評議員 若干人／会長ハ浄土宗執綱之二当リ相談役、理事長、常務理事、理事、主事、評議員ハ会長之ヲ指名囑託ス
- (40) 無署名「編輯後記」（『浄土』第一巻第三号、一九三五年七月）、八〇頁。

(41) 無署名「会員倍加運動に御協力願ひます」(『浄土』第一二巻第五号、一九四六年一〇月)、二頁。同稿によれば、「昨年(一九四五)年の五月二十五日、事務所は遂に災火に見舞はれ、唯一の経済的基礎であつた二万余の会員名簿をはじめ器具も在庫品も一切烏有に帰してしまひました」という。これはアメリカ軍による東京大空襲の被害のためであり、同日は法然上人鑽仰会の事務所が所在した増上寺をはじめ、東京中心部が大きな被害を受けた。

(42) 無署名「鑽仰運動ニュース 今後の時局に依じて本会の発展を策す——本部会を開催す」(『浄土』第四巻第一〇号、一九三八年一〇月、五六頁)、無署名「信仰談に華咲いた第一回「浄土」読者の会」(『浄土』第五巻第四号、一九三九年四月、四八頁)。

(43) 佐藤〔賢順〕「編輯後記」(『浄土』第六巻第四号、一九四〇年四月)、六四頁。

(44) 前掲、金孝敬『支那精神と其の民族性』、自序五頁。

(45) 東慈道「軍病院より」(『浄土』第五巻第七号、一九三九年七月)、同「野戦病院日記抄」(『浄土』第五巻第一一号、第六巻第二号、全四回、一九三九年一月、一九四〇年二月)。

(46) 東慈道著、真野正順序『病める兵の手記』(三友社、一九四〇年)。

(47) 広告「東慈道著、真野正順序『病める兵の手記』三友社」(『浄土』第六巻第四号、一九四〇年四月)、一頁。

(48) 「処分要項／病める兵の手記」(『出版警察報』第一二八号、内務省警保局図書課、一九四〇年五・六月)、一〇八、一〇九頁。
東は、敗戦後の一九四六年に法然上人鑽仰会の本部に復帰した。

(附記) 本論の執筆に際しては、関係各位に多大なる御理解と御協力を頂いた。記して御礼を申し上げます。

正 誤 表

該当箇所	誤	正
130 頁 10 行目, 131 頁後 2 行目	金光植 (김관식)	金光植 (김광식)